



《牧童図》 清原雪信 (1643-82)

研究報告

1. 清原雪信筆《牧童図》について

牧童図（図版Ⅰ） 清原雪信（1643-82） 17世紀後半
絹本着色・掛幅 1幅 寸法35.8×64.4cm
款記「清原氏女雪信筆」
印章「清原女」（朱文八角印）

はじめに

清原雪信（1643-82）は、江戸時代に活躍した狩野派の女性画家である。江戸狩野派の祖・狩野探幽の姪孫にあたる女性で、探幽に画を学び、探幽の大和絵画風をよく受け継いだ人物・花鳥画を得意とした。清原姓は狩野家（探幽）と縁戚関係にあった母方の本姓に由来し、主な活動地も母方の生家のある京都を中心とした関西圏であったと考えられる¹。

実践女子大学香雪記念資料館では、開館当初から雪信の作品を収集している。同館が所蔵する雪信作品を雪信の描いた画題にもとづき大別すれば、次のようになる。大和絵系人物を描く《紫式部図》、唐人物を描く《菊慈童図》、花鳥を描く《鶉図》である。道釈人物を描く作例（広義の仏画）を除いた雪信の人物・花鳥画作品が揃えられており、またそれぞれの作品は雪信画の特徴をよく示した佳品である²。

そして、このたび同館の雪信作品に《牧童図》（図版Ⅰ）が新たに収蔵となった。過去に同館の雪信作品の解説を執筆したご縁で、本図の解説も筆者にお声がけいただいた³。そこで、本稿ではこれまでと同様に画題・構図・図像の観点から本図を検討し、最後に雪信画における本図の位置づけについて考えてみたい。

1. 画題

（1）牧牛図／牧童図について

牧牛と牧童を描いた作品を「牧牛図」あるいは「牧童図」という。「牧牛図（牧童図）」の画題が多く描かれるようになったのは中国の南宋時代からである。日本にも室町時代に李迪筆《雪中帰牧図》（奈良・大和文華館蔵）や伝閻次平筆《秋野牧牛図》（京都・泉屋博古館蔵）など南宋画院の優品が舶載し、唐物の名品として足利將軍家や大名家によって珍藏されてきた。また、禅宗では鎌倉時代に画題の伝わった「十牛図」が知られ、中国の版本をもとに中世以降盛んに制作された。「十牛図」とは、悟りへ至る過程を牧童が牛を探し求める物語として絵画化した禅画である。日本でも「牧牛図（牧童図）」や「十牛図」への関心が高まったことにより、雪舟筆「倣李唐牧牛図」（山口県立美術館蔵）や伝周文筆《十牛図》（京都・相国寺蔵）など、以後多くの画家たちがこの画題（以下本稿では本図との比較の便宜上、自然景に牧牛と牧童を描く作例を「牧童図」と総称する）を描くようになる。

（2）江戸狩野派の牧童図

前代の流れを引き継ぎ、近世の狩野派でも牧童図が制作された⁴。狩野探幽筆《十牛図》（栃木・佐野市立吉澤記念美術館蔵）は、隠元隆琦ら黄檗僧が偈頌と題跋を担当し、最晩年の探幽が絵を描いている。偈頌の款記より、延宝元年（1673）頃の成立と考えられ、狩野派の画家による制作年代の明らかな「十牛図」の作例として重要な作品である⁵。

また、牧童図は探幽、常信、安信など狩野派の主要な画家たちの倣古図、絵手本類に散見する。探幽は《学古帖》（個人蔵）に二点、《臨画帖》（個人蔵）に九点の牧童図を収めており、さらにそのうち《臨画帖》の五点は前述の雪舟筆「倣李唐牧牛図」の一図を含む雪舟系の牧童図である。常信は《流書手鑑》（東京国立博物館蔵）に探幽と同じく雪舟筆「倣李唐牧牛図」の二点と倣古図の画帖（米国・メトロポリタン美術館蔵）に「倣戴嵩筆意」「倣張汝筆意」の牧童図、安信は《唐絵手鑑》（伝安信筆。奈良・大和文華館蔵）に前述の「李迪筆雪中帰牧図」

の模写が確認できる。これら倣古図の遺品からも、牧童図が江戸狩野派の重要な画題であったこと、和漢の古画を学び、特に雪舟系の牧童図を規範としていたことが見て取れる⁶。特に探幽は、その収録数の多さからも牧童図に強い関心を寄せていたようである。

そして、雪信の場合であるが、雪信は探幽のもとで画を学び、探幽画風の強い影響下にあった画家である。その雪信であれば、探幽の古画学習を踏まえた上で探幽画風の牧童図を描いたものと考えられる⁷。つまり、本図は探幽の古画学習の成果を継承して描かれた探幽様式の牧童図の作例としても注目されるのである。

2. 構図

本図はやや横長の絹本作品で、画面中央に牧牛の背に乗って笛を吹く童子が描かれている。その右側には二本の柳の木と、その木陰で摘み草を片手に談笑する二人の童子の姿が見える。背後には左に向かってなだらかに傾斜する土坡を描き、地面には下草が茂っている。全体に色調を抑えた水墨淡彩を基調とし、人物以外は基本的に輪郭線のない没骨の柔らかな筆で仕上げられている。細やかな筆致による丁寧な画面作りはどの雪信作品にも共通する特徴である。雪信が描く大和絵系の物語絵の作品に見られるような華やかさはないものの、その分、雪信画の特徴である涼やかで凛とした空気が引き立ち、画面の清らかさがよく表れている。落款は「清原氏女雪信筆」と記し、「清原女」の朱文八角印（挿図1）を押している。この組み合わせは、画中での署名捺印の位置も含め、雪信作品に最も多く認められる落款形式である。

（1）横画面形式の構図

同館《紫式部図》をはじめ、雪信は横長の画面に人物を描いた物語性のある作品を多数制作している。横長の画面は、絵巻物のように時間経過のある物語を描くのに適しており、物語絵を多く手掛けた雪信が好んで用いた画面形式である。また、それらの作品は、基本的に対角線構図をとり、画面の片側に樹木と土坡を配置し、その対角には余白が設けられている。この構図は、縦幅の同館《菊慈童図》（挿図2）や花鳥画の同館《鶉図》でも応用、踏襲されており、雪信が得意とした構図であることがわかる⁸。このような横画面形式の構図は、狩野派内で描かれた絵巻物や探幽筆《源氏物語 賢木・滯標図屏風》（東京・出光美術館蔵）などの屏風絵のほか、横画面の多い倣古図の構図なども参考に習得したものと考えられる。

本図もほかの雪信作品と同様、横長の画面に対角線構図で描かれた作品である。同館《紫式部図》に比べて景物を描かず、余白の広いすっきりとした画面作りをしている。画中からは、童子の奏でる笛の音が響くような風情が漂い、同じ構図であっても画題に合わせて景物を調整し、空間演出にも工夫が見られる。また、画面の片側に配される樹木についても、大和絵画風の《紫式部図》の松（挿図3）では、幹と枝が濃墨の輪郭線で描かれているのに対し、水墨淡彩を基調とする本図の柳（挿図4）では、輪郭線を用いず、没骨の柔らかな筆致で描かれている。この樹木は、対角線構図を支え、画面を引き締める効果も担うため、雪信画では比較的強調して作画される景物である。本図では、水分を多く含んだ濃墨のほかしを活かすことで幹に量感を与え、前後する木々の濃淡も変えることで、空間の奥行や湿潤な空気も表現されている。

（2）探幽様式の継承

雪信画における対角線構図や余白による空間演出は、探幽の絵画様式に学ぶところが多い。例えば、本図の全体的な構図や画面構成は、探幽筆《竹林七賢・香山九老図屏風》（静岡県立美術館蔵）のうち「香山九老図」を反転させたものと類似している。特に、画面を横切る土坡、前後に配した木々、その下に座る人々、動物に騎乗する人物、後方に開けた広い余白などが共通しており、本図ではより意識的に探幽の構図法が試みられている。

また、前述した探幽の《臨画帖》と《学古帖》に収録される牧童図には、自然景の中に牧牛と牧童を描いた牧歌的で和やかな内容のものが多く、本図もその趣向を踏襲している。加えて、柳の木のある自然景や、騎牛する童子、地面に座る童子、向かい合う童子など、本図の画面構成を考える上で参考となる個々の図像や景物も多く、歪曲した柳の図像や濃淡による木々の遠近表現も《学古帖》の倣古図に近似した描写が見られる。これらの符合は、探幽の古画学習や絵画理解が雪信の絵画制作に強く影響していることを示している。この点において、雪信の古画学習とは、探幽の筆意を理解する手段でもあり、倣古図の参照は伝統的な絵画表現や絵画技法を習得する感覚に近いものと考えられる。

3. 図像

本図には、「騎牛して笛を吹く童子」と「地面に座る童子たち」が雪信特有の細やかな筆致で丁寧に描かれている。両者は、牛上と地面、独りと複数、独奏と談笑というように対比され、その姿も、端正な顔立ちで小綺麗な着物の少年と、やや卑俗な顔立ちで継ぎ接ぎのある粗末な着物の少年たちとして描き分けられている。この対比表現により、騎牛の童子は他の童子たちとは違う存在であることが視覚的に説明されている。

(1) 騎牛して笛を吹く童子

この「騎牛して笛を吹く童子」の図像(挿図5)は、禅宗絵画である「十牛図」の「騎牛帰家」に依拠した図像である。「騎牛帰家」は、悟りの境地へ至る十話のうち、牛と心を通わせたことで悟りの境地に入った(と錯覚した)ことを表す六段階目の図である。騎牛して笛を吹きながら牧童が家に帰るという一種の悟りの境地を表すその図像は、図柄の意味としても図像的な面白さとしても印象深く、独立した牧童図として描かれることが多い。例えば、拙宗等揚筆《琴高仙人・牧童・高士観梅図》(九州国立博物館蔵)の「牧童図」では、柳の木の下で歩みを進める牧牛とその背に乗って笛を吹く童子の後ろ姿が描かれている。「騎牛帰家」を連想させつつ、牧童図としても成立する作例である。騎牛して笛を吹く童子を中心に描く本図も、そうした古画の伝統を踏まえた騎牛帰家系の牧童図といえる。

本図の図像の典拠としては、前述した探幽筆《十牛図》の「騎牛帰家」(挿図6)に系統する図像が想定される。探幽はこの図像を『四部録』や『五味禅』などの中国版本に載る「十牛図」の挿絵を手本に描いたと考えられるが⁹、嘉永3年(1850)の陶山雅純による《探幽筆十牛図模本(騎牛帰家)》(東京国立博物館蔵)では、探幽筆《十牛図》(挿図6)と類似した図像が模写されており、後世において同種の図像が探幽系の「騎牛帰家」の図像として享受されていたことをうかがわせる。

これら探幽系の「騎牛帰家」の図像と本図を比較すると、雪信は童子の髪型を髷から垂髪に変更し、足の組み方を逆に描き変えていることが判明する。垂髪の童子像は、伝周文筆《十牛図》に例があり、特に「騎牛帰家」の丸みのある顔の輪郭や横になびく垂髪の描写、笛を水平に構えた姿勢、指の仕草など共通する点も多い。古画学習などで同種の図像を参照していた可能性も考えられる。また、垂髪の童子の顔貌(挿図7)は、同じく垂髪で描かれた同館《菊慈童図》の顔貌(挿図8)ともよく似ている。特に弓なりに弧を描く眉から細長の目元、鼻筋にかけては、小顔ながら雪信の描く人物の眉目秀麗な顔立ちをよく表している。童子の髪型を垂髪に描くことは、伝周文筆《十牛図》などの古様な図像を踏襲する意味と、《菊慈童図》のように美しい容貌を持った中性的な少年像を表現する意図があったと考えられる。なお、笛を吹く姿に関しては、探幽筆《笛吹地藏図》(米国・パーク財団蔵)の指の形や横になびく袖の描き方などが似ており、人物の作画も基本的には探幽の人物像から学んでいる形跡が認められる。

童子の足組みの相違については、本図が「十牛図」ではなく「牧童図」であることが理由としてあげられる。「騎牛帰家」の図像は「十牛図」と直結し、その多くは円窓の小画面の中で完結する図である。雪信は、その特徴的な図像をそのまま写さず、本図の横長の構図や複数の童子を描く画面構成などに合わせて騎牛する童子の姿勢を調整し、より自然な牧童の姿を描こうとしている。童子の着衣を中国風から簡略化した着物へ描き変えていることも同様の理由と考えられる。

(2) 牛

童子を乗せる牛の図像は、正面性があり、体をくの字に反らせた特徴的な姿勢をとっている。雪信は淡墨淡彩で牛の体躯と頭を描き、繊細な筆と彩色で牛の角や瞳、蹄、体毛などを丁寧に描き込んでいる。この牛の図像は、前述の「騎牛帰家」に伴う図像であるほかに、狩野派内で数多く描かれた独立した牛の一図像でもある。例えば、探幽筆《飛禽走獸図巻》(東京国立博物館蔵)には、本図と近似する牛の図像が確認できる。牛の姿勢以外にも、淡墨淡彩による陰影のつけ方や探幽筆《十牛図》(挿図6)では省略されていた牛の毛を描き込むところなど、描写でも本図の牛と共通する点が多い。また、探幽ら狩野派の絵師たちが牛と馬をそれぞれ描いた《牛馬図》(個人蔵)の「牛図」では、狩野守定による同図の牛の図像のほか、類似した牛の図像も複数見られ、この牛の図像が狩野派内で類型化、様式化していたことを示している。

これら狩野派の牛の図像と本図を比較すると、牛が後ろ足を広げて地面を踏みしめる姿勢は探幽筆の牛に近く、四本に引かれた首の皺と背中を正面に向けて胴体が張り出して見えるところは守定筆の牛に近い。様

式化した牛の図像であるため、複数の手本や先行作品を参照していたものと考えられる。

なお、本図では、雪信が人物に比して牛を描きなれていない様子もうかがわれる。牛の体軀、特に横腹と後ろ足の部分や前足の位置が曖昧であり、正面を向く牛の胴体も丸い団子のようにになっている。作品全体の調和を意識してか、牛のごつごつとした輪郭や体格を表す墨の陰影も強弱が薄く、やや平面的である。牛の体軀を把握して描き切れていないところに、本図制作時における雪信の画技が成熟前と知られるのである。

(3) 地面に座る童子

地面に座る二人の童子については、明確な図像の典拠は確認できていない。木陰でくつろぐ牧童の絵画作例としては、伝閻次平筆《秋野牧牛図》の二人の童子のほか、探幽筆《臨画帖》の雪舟系牧童図に木にもたれて休む童子の姿が見える。《臨画帖》の他の雪舟系牧童図には地面に向かい合って座る童子を描いたものがあり、探幽筆《学古帖》の牧童図でも木の下に腰を下ろす童子や一画面に複数の牧童を描いたものが確認できる。これらの先行作例は、複数の童子がともに遊びに興じ、休憩する姿を描くことで、より長閑で牧歌的な絵画として牧童図を見ることができる。本図も、画面上で余暇を楽しむ童子たちからは、和やかな様子が受け取られる。以上のことから、本図における二人の童子は、騎牛する童子と対比させるため、牧歌的な牧童図を表現するために、雪信が古画などを参照して描き加えた人物像ではないかと推測される。騎牛する童子を眉目秀麗な少年として描き、「騎牛帰家」の図像を本図の画面に合わせて調整していることも踏まえれば、より鑑賞性の高い牧童図を描くことを意図して本図は制作されたものと考えられるのである。

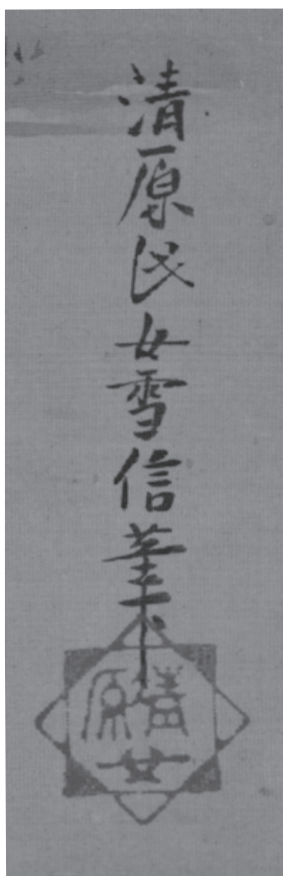
以上、本図について考察を述べてきた。総括として、構図や図像の比較検討から本図を捉え直してみたい。本図は雪信が探幽を主とする狩野派の古画学習の成果から多くを学び、描かれた牧童図である。構図や図像は基礎を探幽画に倣いつつ、古画学習から得た知識や技法も応用して描かれている。探幽の画風を逸脱しない範囲で絵画表現の創意工夫を試みるところは、雪信の画家としての立ち位置を示すと同時に、その作画姿勢こそが雪信自身の画風形成に繋がる一要因であったと考えられる。また、本図は牧童図として楽しむ鑑賞絵画の性格と、「十牛図」を連想させる教養絵画としての性格を併せ持って制作されている。雪信は源氏絵や歌仙絵、中国の故事絵など古典に取材した作品を多く描いており、本図も伝統的な「牧童図」の画題と「十牛図」の図像を併用して描かれた作品である。古典に取材した画題や図像を踏まえて描かれる鑑賞性の高い雪信の絵画は、雪信画の享受層として想定される文化人たち（例えば公家文化や古典の教養を重んじる武家をはじめとした上層階級の人々）の好みと需要に叶うものであったと想像される。本図もそうした文化人たちの間で鑑賞されたものと考えられるのである。

おわりに

最後に、雪信画における本図の位置づけについて私見を述べて本稿の締めとしたい。雪信筆の牧童図の遺品は、他の画題に比べればそれほど多くない。本図は雪信の牧童図の現存作例としてまず貴重である。加えて、本図は雪信の描く構図や図像、画風の特徴をよく示し、牧童図としても、牧歌的で詩情にあふれた佳品である。本図を雪信作品の中で分類した場合、その鑑賞性の高い画面を見れば、同館《菊慈童図》と同じ作品群に類して良いように思われる。一方で、画面中央の「騎牛して笛を吹く童子」は、禅宗絵画の「十牛図」に由来する図像であり、雪信が古画の伝統を踏まえて意図的に描いていることは本稿で考察してきたとおりである。十牛図系の牧童図として捉えた場合、本図は同館未収蔵の雪信が描く広義の仏画作例、あるいはそれを補完する作品として位置づけることもできるだろう。また、本図の存在やその出来栄は、雪信が大和絵系の物語絵や美人図以外にも眉目秀麗な童子図を得意とし、水墨淡彩を基調とした作品も多く手掛けていたことを予感させる。その点においても、本図は雪信画の実態を把握する上で有意義な示唆を与えてくれる作品である。雪信画にとって重要な本図が早期から雪信作品を収集、研究してきた同館の所蔵となったことを筆者は喜ばしく思うのである。

(佐野市立吉澤記念美術館 学芸員 大平 有希野)

- 1 雪信の伝記については別稿で考察している。拙稿「清原雪信の伝記に関する考察 —『古画備考』雪信伝の再検討と「清原氏」をめぐる問題を中心に—」『美術史』第177冊、美術史學會、2014年。
- 2 各作品については以下を参照。なお、同館は雪信の娘・春信の作品《花鳥図屏風》《芙蓉・菊図》も所蔵する。
紫式部図：仲町啓子「カラー図版解説」『実践女子学園香雪記念資料館館報』創刊号、実践女子学園香雪記念資料館、2004年。
菊慈童図：拙稿「清原雪信筆 菊慈童図」『國華』第1397号、國華社、2012年。
鶉 図：拙稿「清原雪信筆「鶉図」について」『実践女子学園香雪記念資料館館報』第12号、実践女子学園香雪記念資料館、2015年。
- 3 前掲註2拙稿「清原雪信筆 菊慈童図」、「清原雪信筆「鶉図」について」。
- 4 狩野派の牧童図については以下を参照。『祈りのすがた — 下野の仏画 — 』（展覧会図録）、栃木県立博物館、2005年。『中国憧憬 — 日本美術の秘密を探れ — 』（展覧会図録）、町田市立国際版画美術館、2007年。
- 5 作品解説「狩野探幽 十牛図」『佐野市立吉澤記念美術館コレクション選』佐野市立吉澤記念美術館、2012年。
- 6 狩野派の古画学習については以下を参照。鬼原俊枝「狩野探幽筆「学古帖」と流書手鑑」『美術史の断面』武田恒夫先生古稀記念会、1995年。野田麻美「江戸狩野派による雪舟学習をめぐる諸問題 — 倣古図の分析から」『天開圖畫』11号、2019年。同氏「模写と倣古 — 江戸狩野派の場合」『日本美術のつくり方 佐藤康宏先生の退職によせて』羽鳥書店、2020年。同氏「江戸狩野派による模本と倣古図に関する一考察 — 狩野常信・栄信・養信ほか「唐絵手鑑」の分析を中心に」『忘れられた江戸絵画史の本流—江戸狩野派の250年／江戸狩野派の古典学習 — その基盤と広がり』（展覧会図録）、静岡県立美術館、2021年。
- 7 雪信の絵画制作における狩野派の古画学習と探幽様式の継承については、同館《鶉図》の解説でも考察している。前掲註2拙稿「清原雪信筆「鶉図」について」。
- 8 雪信の対角線構図と絵画様式については以下も参照。伏谷優子「江戸時代初期の狩野派における大和絵様式の継承について — 清原雪信の作品とその画風を中心に — 」（『鹿島美術研究』年報第17号別冊、鹿島美術財団、2000年。
- 9 前掲註4「中国憧憬 — 日本美術の秘密を探れ — 』参照。



挿図1 清原雪信《牧童図》
款記・印章
実践女子大学
香雪記念資料館蔵



挿図2 清原雪信《菊慈童図》
実践女子大学
香雪記念資料館蔵



挿図3 清原雪信《紫式部図》部分
実践女子大学香雪記念資料館蔵



插图4 清原雪信《牧童图》部分



插图5 清原雪信《牧童图》部分



插图6 狩野探幽《十牛图》（骑牛归家）部分
佐野市立吉澤記念美術館蔵



插图7 清原雪信《牧童图》部分



插图8 清原雪信《菊慈童图》部分